

テクニカルダイアリー

初期(年内)に感染すると、成

モザイク病について

近年問題となっているモザイク病は、アブラムシがウイルスを媒介することで発生する病気です(写真⑥⑦)。生育

本年産は暖冬により生育はやや前進しましたが、後半の3~4月は数回の強風に見舞われ、トンネルが飛ばされる被害も見られました。病虫害では、アブラムシや赤色斑点病の発生が例年よりも早かったほか、カメムシによる吸汁被害の問い合わせが多く寄せられました。

令和6年産の振り返り

長が阻害されて枯死に至る場合もあります。

●対策

①基本的な栽培管理(中干し実施による過繁茂防止、適正施肥)で稲体を健全に維持し、下葉の枯れ上がりを防止しましょう。

●対策

②出穂後2週間は湛水状態を保ち、その後は間断かんがい

茶米について

J A 山武都市の令和6年産米の1等比率は90%(9月6日時点)で、例年と比べて約7%低くなりました。今年の等級落ちの原因として多く見られたのは「茶米」と「白未熟粒」です。「茶米」は被害粒の一種として外観品質を下げ、「白未熟粒」が多いと整粒が減り、歩留まり率が下がります。今回はこれらの原因と対策をご紹介します。

初め(年内)に感染すると、成

被覆時期と防寒対策

ソラマメは、幼苗期(本葉5枚まで)は寒さに強いですが、越冬時に大きく育った株は耐寒性が弱くなるので、無理な早播きは避けましょう。また、被覆時期が早いと生育が進み過ぎるため、1月下旬以降を目安に被覆を行いましょう(写真⑧)。

連作を行うと感染リスクが高まるので、土壌消毒を付けた前に行うか、同一圃場での栽培はできれば5年以上(最低でも1年)空けましょう。ウイルスを媒介するアブラムシ対策として、定植時にアドマイヤー1粒剤を処理し、年内にアブラムシが発生するようであれば追加防除を行います。気温が上昇する頃からアブラムシが急激に増加するので、発生前から予防散布を行うことが重要です(表③参照)。

●対策

①出穂7~5日前(穂ばらみ期)に葉色を確認しましょう。葉色が淡く目標値(表②)に達しない場合は、軽減対策として10ア当たり窒素量で1キを上限(食味低下を防ぐため)に追肥を施用しましょう。

●対策

②根の活力を維持する水管理を行いましょう(茶米の対策②を参照)。

白未熟粒について

籾へのデンプン蓄積が不十分であった場合に起こる症状です(写真②~⑤)。幼穂形成期の過繁茂により籾数が過剰になる、出穂後の葉色低下により光合成量が低下する、早期落水により根が断絶されて吸水力が不足する等、複数の要因が関係し、登熟期の高温により発生が助長されます。



トンネル支柱を使って被覆する

強風に飛ばされないう、マイカー線などで押さえる

写真⑧ 被覆の仕方



写真⑦ アブラムシの群生(幼虫)



写真⑥ ソラマメのモザイク病 (「ルーラル電子図書館」より引用)



写真⑤ 腹白未熟粒



写真④ 背白粒



写真③ 基部未熟粒



写真② 乳白粒



写真① 茶米

※写真②~⑤の赤丸部分がデンプン蓄積不十分で白く濁っている。写真はすべて農林水産省ホームページより引用

表③ 未成熟ソラマメに登録のある薬剤

対象病虫害	薬剤名	使用量・希釈倍率	使用時期	使用回数
えそモザイク病 一年生雑草	バスアミド微粒剤	30kg/10a	播種21日前または定植45日前まで	1回
	アドマイヤー1粒剤	3kg/10a	播種時	合わせて1回
アブラムシ類	アディオン乳剤	2g/植穴	定植時	
	アディオン乳剤	3000倍	収穫7日前まで	3回以内
	モスピラン顆粒水溶剤	4000倍	収穫7日前まで	3回以内
	スミチオン乳剤	1000~2000倍	収穫3日前まで	3回以内

カラースケール付きうちわ



営農・経済センターにご用意していますので、ご希望の方は各センターまでお問い合わせください。

表① 収穫適期の目安

品種	出穂期から収穫までの日数	出穂期後が高温の場合
ふさおとめ	33日	左の日数より3~5日程度短縮する
ふさこがね	37日	
コシヒカリ	38日	
粒すけ	38日	

※「高温に負けない稲づくり(千葉県・JA全農ちば作成)」より引用

表② 各品種の出穂期の葉色目標値

品種	葉色(カラースケール値)
ふさこがね	約4.5
コシヒカリ	約4
粒すけ	約4